

シャーロット・ブロンテ初期作品研究（5）

——ブランウエルのアレグザンダー・パーシ像を中心に——

岩 上 は る 子

(平成6年6月10日受理)

序

ブランウエルが創作した初期作品は、量的にはシャーロットのそれに匹敵すると言われているが、シャーロットの場合のように作品の編集が進んでいないことから、ブランウエルが初期作品において果たした役割は軽視されがちである。そもそも物語の発端は彼の人形遊びにあり、グラスタウンの地理的位置づけと歴史背景、植民地建設の経過、新国家アングリアの建国、その後の権力闘争といった物語の展開をリードしたのはブランウエルであった。シャーロットは弟が描く荒削りな骨組みに肉付けをし、主人公たちの演じる愛憎劇を創り上げていった。アレグザンダー・パーシ、メアリ・ヘンリエッタ、ヘンリ・ヘイスティングズなどの主要な登場人物がブランウエルの発案であったことを考えれば、彼が初期作品世界の構築において果たした役割の大きさを認めざるを得ないのである。

ブランウエルが1827年から1833年までの間に書いた作品は、今日でもかなり残存している。だが1834年以降の手稿は分断されたり一部が紛失しているなど問題も多い。ブランウエルが手稿を整理しなくなり、創作の順序も構わず積み重ねておいたことも混乱の一つの原因である。だがもっとも大きな原因は、1895年にシャーロットの夫 Arthur Bell Nicholls からブロンテ手稿を買い上げた T. J. Wise の操作にある。ワイズは綴じられた豆本を切り離して売却したり、別々の作品をまとめて製本するなどの行為を行った。さらに彼がブランウエルの手稿をシャーロットやエミリの手稿として売却した事実も報告されている。その後シェイクスピア・ヘッド版によるブロンテ全集において *The Miscellaneous and Unpublished Writings of Charlotte and Patrick Branwell Brontë* (vol. 1, 1936/vol. 2, 1938) の実質的な編集にあたった J. A. Symington は、全体の半分はブランウエルの作品を収録することで、それまでの彼に対する過小評価を一変することを期待していた。だが編集作業の進行中に、もう一人の編集者であったワイズが死亡したり協力者 C. W. Hatfield が引退するなどの困難も加わって、最終的には収録された原稿のほとんどが手稿のファクシミリのままという結果に終わった。

手稿研究にはおよそ5つの行程がある。まずオリジナル原稿の所在をつきとめ、その形態を記録した「目録」の作成である。次に手書きの原稿を「解説」という困難な作業がある。とくにブロンテ初期作品はかれただけを読者としていたため、拡大鏡を必要とするような細かい文字で書かれ、さらに綴りの誤り、句読点の癖、段落の問題などがあり、その判読は困難をきわめている。手稿を読みやすい形に「転写」し、出版のための「校訂」に至るには、さらに表記の問題が加わる。こうした資料の整備が済んではじめて研究がスタートすることになる。内容の精密な読みとり、手稿全体の中での位置づけを経て、言語的な分析、文体比較、主題の変遷といった個々のテーマ研究が可能になる。ブランウエルの手稿について言えば、現在のところ Victor Neufeldt による作品目録が完成した段階で、作品については巻末に示した数点が出版されているに過ぎない。

(一) 詩人ヤング・スールトとして

残存するブランウエルの最も古い作品は、9歳の時に書かれた 'My Battell Book' (3. 1827, スペルは原文のまま) および 'History of the Rebellion in My Fellows' (9-12. 1827) である。前者には30語ほどの断章の他に、"Battell of Washington" と題された絵やアメリカ大陸の地図が綴じ込まれている。これは実際に1814年9月に起こった Battle of Washington を題材にしたもので、ソースは1827年3月から4月に *Blackwood's Magazine* に連載された "Narrative of the Campaign of the British Army at Washington and New Orleans" であると考えられている。後者は8ページおよそ900語から成る物語で、そこには主役として巨人の島の族長 Boaster が登場し、Goodman という名の悪党の反乱を鎮圧し爵位を授けられる。こうした物語が後のグラスタウン物語とどのように関わっていたかは不明だが、そこには初期作品の創作の基本的パターンが窺われる。同時期にシャーロットが幼いアンのために書いた物語が、まったく内容の異なるおとぎ話であったことを考えると、Young Men による探検物語はブランウエルの主導で始められた可能性が高いように思われる。

ブランウエルは実際の『ブラックウッズ誌』をまねて、1829年1月に 'Branwell's Blackwood's Magazine' を創刊した。現在では創刊号、6月号、7月号が残されているのみだが、8月に編集をシャーロットに譲るまで、ブランウエルは詩、劇、評論、旅行記、広告などを精力的に書きまくった。1829年に雑誌の編集長を辞めた後、ブランウエルは Young Soult the Rhymer としてグラスタウンを舞台に詩人としての活動を始める。散文用の筆名である John Bud が堅物で保守的な中年弁護士であったのに対して、スールトは守り神や「勇士」たちの「専制政治」を批判する才気煥発な若者となっている。シャーロットのウェリントン公爵とその息子たちを中心に秩序づけられていくグラスタウン社会において、ブランウエルはそこにおける自分の立場を反逆者として確立していくのである。

こうしたブランウェルの位置づけは、物語発生の時点にまで遡ることができる。シャーロットが自分の人形をウェリントン公爵と名付けたのに対して、ブランウェルは敵役のナポレオンを自分の主人公に選んだ。その後 'The History of the Young Men' (12. 1830-5. 1831) に描かれたグラスタウン連邦では、ナポレオンは4王のひとり Alexander Sneachie (または Sneaky) と改められている。やがてシャーロットが物語の主人公をウェリントン公爵から息子たちに移行したのを受けて、ブランウェルはナポレオンの部下で実在のフランス軍元帥 Marshal Soult (Nicolas Jean de Dieu, Duc de Dalmatie, 1769-1851) の架空の息子としてヤング・スールトを創り出した。彼はイベリア半島戦争においてウェリントンが対戦したフランス軍の指揮官であったが、ウェリントン公爵の前任者 John Moore が戦死した際に弔意を表したことでイギリス国民にも尊敬された軍人であった。姉弟妹はこうした出来事を 'A Subaltern — A Journal of the Peninsular Campaign' (『ブラックウッズ誌』 1825年に7号にわたって連載) で読んでいた。

1829年から30年にかけてはブランウェルが詩作に最も没頭した時期であった。彼はヤング・スールトとして 'A Collection of Poems... Illustrated with Notes And Commentaries by Monsieur De La Chateaubriand' (9. 1829) および 'Lausanne: A Tragedy' (12. 1829, スペルは原文のまま) を創作した。また1830年に入ってから、詩劇 'Caractus: A Dramatic Poem' (1.1830) や 'The Revenge: A Tragedy' (11-12. 1830) を書き上げている。'Caractus' のタイトルページには、詩において最も重要なのは情熱であるという見解を示す、スールトによる次のような一文が掲げられている。"In Dramatic Poetry the passions are the chief thing and in Proportion as excellence in the depicting of these is obtained so the writer of the poem takes his class among dramatic authors" (SHCBM2, 405) スールトは詩に対してきわめて真剣で、シャーロットの雑誌に登場する批評家たちに対して、彼の詩を正当に評価するよう訴えている。

こうしたスールトの姿をシャーロットは 'Characters of the Celebrated Men of the Present Time' (12. 1829) において紹介している。詩人としての評価は「想像力には見るべきものがあるが、韻律が苦手で調べが滑らかでない」とし、また彼の容姿と性格については「身だしなみに無頓着で、髪はもじゃもじゃで、酒と賭事には異常なほど熱狂する」(Alexander CB1, 127) と記している。シャーロットが雑誌を引き継いだとき編集方針をめぐって意見の相違があつて以来、ふたりの間には対抗意識が生まれていた。シャーロットはロマンティックで自己陶醉気味なブランウェルを、機会を捕らえては冷やかしたり風刺したりしている。自分の主人公に強い思い入れをもっていた点ではシャーロットもブランウェルも同様であるが、主人公との距離のおき方には違いが見られる。シャーロットはドゥアラウ侯爵を彼女の理想にかなったヒーローに仕立て上げるが、その彼の描写は兄に対して劣等感を抱く弟チャールズ・ウェルズリを通して行われる。それに対してブランウェルは、天才詩人と称するヤング・スールトになりきって詩作に没頭しているのである。わき役ではなく主

役として物語に登場するブランウェルはやがてスールトにももの足りなくなり、より強烈な個性をもつアレグザンダー・パーシを創り出していった。

(二) アレグザンダー・パーシの造形

Alexander Percy はブランウェルの作品において一貫して悪役を演じ続ける主人公である。その名前もはじめは「悪漢」を意味する *Rogue* (シャーロットの作品では *Rogue*) であったが、後にゼノウビアと結婚してエルリントン卿 (Lord Erlington シャーロットでは *Erlington*) と呼ばれ、さらにアングリア建国後はノーザンガーランド伯爵 (Earl of Northangerland) に昇格する。彼の反逆者としての素顔を示すときには、貴族の称号とともにロウグという呼び名が併用されることもある。アレグザンダー・パーシが本名として定着するのは、初期作品がかなり進んだ1833年になってからである。また彼の出生や経歴の詳細も、ブランウェルの 'The Life of Field Marshal the Right Honourable Alexander Percy' (1835) をもって始めて完成する。シャーロットの主人公たちがはじめから実在のウェリントン公爵やその息子たちをモデルとして造形されたのとは異なり、パーシは初期作品の展開の中で徐々に創り上げられていった悪役であった。彼はシャーロットの作品にも導入され、彼女の主人公であるザモーナ公爵に敵対する重要な人物になるが、その造形にはブランウェルの影響がかなり見られる。

(1) ロウグの誕生

パーシが通称ロウグとして最初に登場するのは、シャーロットの作品である。'Characters of the Celebrated Men of the Present Time' (12. 1829) において、彼の父親が「外見は紳士らしいが性格は残忍な47歳の男」として紹介されている。その性格を受け継いだ同名の息子は、'An Interesting Passage in the Lives of Some Eminent Men of the Present Time' (6. 1830) に、「ロウグの前途有望なる息子」として顔を見せている。

ロウグが主要な役割を演じるのは、ブランウェルによる 'Letters from an Englishman' (9. 1830-8. 1832) からである。この作品は全8巻からなり、イギリス人の銀行家 James Bellingham がロンドンの友人にグラスタウンの様子を報告するという設定で、18通の書簡で構成されている。ブランウェルは「12人の勇士」が植民地グラスタウンを建設し、原住民のアシャンティ族とも講和が成立し平和が続くことには不満だった。1830年9月に書かれた書簡1と2は、医師ヒューム・バディの家に招待されたベリンガムが解剖されそうになり、ウェリントン公爵に救出されるという話である。これは1828年に発生したバークとヘアによる解剖の為の死体盗掘事件に取材したもので、シャーロットも先の 'An Interesting Passage...' で取り上げている。この時点では姉弟は競い合って作品を

書いていたことがわかる。だが1831年1月に姉がロウ・ヘッドに出発すると、ブランウエルは姉の干渉を受けることなく思いのままにロウグを活躍させる。書簡3と4で、ドゥアロウ侯爵らとウェリントン国に向かったベリンガムたちは、目的地を目前にしてロウグの反乱の知らせを受け、グラスタウンに引き返す。その後の書簡はすべて 'Great Rebellion of March 1831' と名付けられたロウグによる革命の記述にあてられている。

グラスタウン議会で議員資格を剥奪されたロウグは、群衆を扇動して政府軍と衝突する。ウェリントンやスニーキーらの援軍にもかかわらず政府軍は敗北し、ロウグはフランス革命にならって暫定政府を樹立する。だが敗走した政府軍が戻ってきて再び戦争が起ころうとしていた時、「勇士」の長老クラッシーが介入し、彼の命令で平和が回復する。それから1年後、ロウグがふたたび反乱を企てる。グラスタウン連邦の北にあるスニーキー国のフィディーナの街が占領され、火を放たれた街では群衆が逃げまどう。しかし反乱軍はスニーキー父子の軍とパーリー、スタンプス、ウェリントンの援軍に敗れ、捕らわれたロウグは銃殺刑に処せられる。

ここに描かれたロウグは、グラスタウンの建国の勇士やウェリントン公爵などの既存の体制に反発し、民衆を扇動しては反乱を指揮する反逆者である。シャーロットは自作 'The Bridal' (7-8. 1832) において、このロウグの反乱に言及している。ドゥアロウ侯爵とマリアン・ヒュームの結婚の準備が進められている中で、ヴェルドボリスでの反乱の知らせがもたらされる。ドゥアロウ侯爵は民衆に向かって謀反人の打倒を呼びかける。後にザモーナ公爵対ノーザンガーランド伯爵へと発展する対立構造を、シャーロットはこの頃から構想するようになったのであろう。ノーザンガーランド伯爵を自作に導入し悪役として位置づけることで、シャーロットの作品世界にヒーローとアンチ・ヒーローの葛藤が生まれ物語が活性化することになる。

ブランウエルは次作 'The Pirate' (2. 1833) で、処刑されたはずのロウグをふたたび登場させている。髪には白いものが混じり、顔にも歳月を思わせる皺が刻まれている。ヴェルドボリスで部下スデス (S' death または S'Death) と海運会社を営んでいることになっているが、その実態は海賊で、奪った品物を売りさばいている。私ことベリンガムはその秘密を知ったため、海賊船に乗せられ沖合いに連れ去られる。彼らは船が通りかかるとウェリントン公爵の偽造文書を示して油断させ、検査と称して船を乗っ取るというやり方で荒稼ぎをしていた。ある時 Earl of Elrington の船が捕らえられ、ロウグは船に乗っていた伯爵の娘 Zenobia に求婚し、船は港をめざす。帰港に反対なスデスはロウグの暗殺を図るが、逆に銃で頭を打ち抜かれ海に投げ捨てられる。ところがその遺体が海面に達するや、守り神 Branni が姿を現わす。グラスタウンに帰ったロウグはウェリントン公爵に謝罪し、賠償金を払って和解する。

ロウグとゼノウビアの結婚は、ブランウエルの発案によるものと考えられる。シャーロットのヒロインであるゼノウビアはドゥアロウ侯爵に片思いを寄せ、マリアン・ヒュームへの嫉妬に狂うと

いう役どころがすでに与えられていた。それをブランウェルがロウグと結婚させたのは、これによってロウグがエルリントン卿としてヴェルドポリス社交界に登場する状況を準備するためと考えられる。恋愛物語にほとんど興味が無いブランウェルは、ロウグとゼノウビアの結婚についてもその必然性を描く必要は感じていないようである。

(2) エルリントン卿の活動

ブランウェルは 'The Monthly Intelligencer' (3-4. 1833) において、ロウグとゼノウビアの結婚式の模様を伝えている。そこにはシャーロットの作品で結婚したばかりのドゥアロウ侯爵夫妻の姿も見られ、今後の二組のカップルの対比という新しい題材が加えられる。この雑誌はブランウェルが連合王国の首都グレート・グラスタウンのために発行したものだが、一号しか残存していない。クリスマス休暇にロウ・ヘッドから帰省したシャーロットは、'The Trumpet Hath Sounded' (12. 1831) と題された詩を書き、グラスタウンの終焉について考え始めていた。ブランウェルは物語をやめることには反対で、かつてのように雑誌を発行し姉や妹たちの参加を呼びかけたのである。最初の記事は守り神たちの怠慢をなじる文章で始まっている。だがエミリとアンはすでにゴンドル物語に熱中していたし、シャーロットの関心はもはや守り神の活躍にはなかった。

雑誌の残りの記事はすべて、グラスタウン議会の下院議員となったエルリントン卿の活動に当てられている。国会で「12人の勇士」の統治からの独立を訴えた彼は、群衆の支持を背景に四王の退陣を要求する。身分制度の廃止、四王国の統合、新政権の樹立、新憲法の制定といった内容を盛り込んだ彼の法案が、ドゥアロウ侯爵らの反対を押し切って議会を通過する。議会を舞台にエルリントン卿とドゥアロウ侯爵の両陣営が対立し合う構図が創り出されていく。またブランウェルは狡猾で残忍なロウグを、巧みな弁舌と風貌によって群衆を惹きつけ熱狂させるエルリントン卿へと変貌させていく。シャーロットはヴェルドポリスの上流階級の人々の姿を好んで描いたが、ブランウェルはむしろ社会の裏面や人々の隠された素顔を暴くことに興味をもっていた。エルリントン卿は貴族の仲間入りをしながらも、一方でロウグとして暗躍を続ける二つの顔をもつ人物として複雑化していく。John Flower を筆名とした 'Real Life in Verdopolis' (4-9. 1833) は、ヴェルドポリスの名士たちが繰り広げる陰謀、狂乱、賭博、決闘などに明け暮れる生活ぶりを伝えている。

第1巻はロウグによる騒乱である。グラスタウンの公会堂では、政府の輸送車を襲った Rare Lads に対する裁判が開かれている。背後には大物の首謀者がいるのだが、彼らはその名前を白状しようとしぬ。その夜、牢獄のまわりに群衆が集まり、その数は政府の治安部隊には抑えきれないほどに膨れあがる。やがて牢獄が襲撃され焼け落ち、囚人たちは逃走する。この騒乱の仕掛人であるロウグは手下の Montmorency に片付けを命じて、自分は山岳地帯の隠れ家に身を潜める。翌日、新聞には牢獄襲撃事件の詳細が報じられ、首謀者がエルリントン卿であることが弁護士

Tweezy によってほめかされる。彼は卿のお抱え弁護士であったが、卿が秘密を知る彼の口封じを図ったため先手を打ったのだ。この事件に揺れるグラスタウンの町に、Philosophers Isle での学問を終えたばかりの一人の若者が到着する。Castlereagh である。彼は勧められるままに、'Elysium or Paradise of Souls' という会に入会する。それは殺人経験があることを会員資格とし、ロウグが会長をドゥアロウ侯爵が副会長を務める秘密結社であった。

第2巻はカースルレイを中心に展開する。モンモレンシーに招待されたカースルレイは、その娘 Julia を見初める。議会の見学に出かけたカースルレイは、グラスタウンの政治勢力が建国の勇士たちを中心とする Aristocrats と、エルリントン卿を指導者とする Democrats に二分されていることを知り、自分も国会議員になることを考える。エルリントン卿のパーティでは、カースルレイはジュリアと踊ることになっていたが、スニーキーの息子 Thornton が強引に割り込んだことから喧嘩になり、翌朝、ロウグの立ち会いのもとで決闘が行われる。軽症を負ったソントンは怖じ気づいて敗北を認める。カースルレイは自分が付き合っている仲間たちは立派な人間とはいえないことに気づいているのだが、酒と賭博の熱狂から逃れられない。ジュリアは恋人が賭事で財産をすり減らしていること、しかも彼を誘惑しているのが自分の父親であることに胸を痛めている。やがて破産したカースルレイはジュリアに別れを告げにいく。彼女がソントンにつれ去られたことを知った彼は、故国へ向かうソントンに追いつき負傷させジュリアの救出に向かう。街ではロウグとモンモレンシーが牢獄の襲撃犯として指名手配されていた。ドゥアロウ侯爵はカースルレイを閣僚に任命し、彼は借金を返済してジュリアと結婚する。

シャーロットはブランウェルとは別に、こうしたエルリントン卿の若き日の悪事を 'The Green Dwarf' (9. 1833) の中で描いている。ロウグはエミリー・チャールズワースを自分のものにするため彼女の許婚者サン・クレールを陥れるが、陰謀が発覚し16年の国外追放の刑に処せられる。これによってブランウェルの作品で一度は処刑されたはずのロウグが生き返るという矛盾が解決される。またロウグの暗い過去を書き加えることで、悪役としての人物像が肉付けされる。ブランウェルによるロウグの造形が行動中心であるのに対して、シャーロットは細かな性格描写を積み重ねていく。たとえばロウグの端正な顔立ちの下に腹黒い邪心を見抜き、蒼白くこけた頬に身持ちの悪さを読みとることで、彼を表裏ある油断ならぬ人物として造形していくのである。

ブランウェルは続いて 'The Politics of Verdopolis' (10-11. 1833) において、パーシの2番目の妻 Mary Henrietta Percy との間に生まれた同名の娘を初めて登場させる。ブロンテ博物館所有のボンネル・コレクションに収録された C. W. Hatfield による筆写原稿からその概要を紹介する。

ウェリントン国のグラスタウン郊外の墓地に、司直の手を逃れ疲労の色を浮かべたパーシが詣でている。墓石には「メアリ・ヘンリエッタ・パーシ、1815年5月1日死去、享年21歳」と刻まれている。最愛の妻を亡くして18年が過ぎ、若かったパーシも今では40歳である。遺児メアリは聡明な

娘に成長し、父がヴェルドボリスの後妻ゼノウビアのもとからたまに帰省するのを楽しみにしている。父娘が連れだって町に出ると、新聞では議会解散の見込みが報じられ、にわかに選挙活動が展開される。パーシの選挙区からは Sir Robert Pelham とアシャンティ族長 Quashia が立候補する。結果は Constitutional から出馬した Morely と、Democratic のロバート卿が当選する。落選したクォーシャはパーシに選挙資金の返還を迫り、断られると代わりに娘メアリを妻にもらうことを承諾させる。だが彼女はすでにロバート卿と婚約していた。議会へ登院するため、一行はヴェルドボリスに向かう。メアリは初めて継母に引き合わされ、ヴェルドボリスの社交界に入った彼女は憧れのドゥアロウ侯爵に出会う。クォーシャはロウグの工作によって、国会議員暗殺の罪を着せられ逃亡を余儀なくされる。

ブランウェルはメアリ・ヘンリエッタを、それまでのシャーロットの可憐なヒロインたちとは違って、美人だが率直で飾り気のない父親ゆずりの芯の強さをもった女性にしている。彼女は間もなくシャーロットの作品に導入され、アングリア伝説における重要なヒロインに成長していく。ブランウェルの作品ではメアリとロバート卿の結婚の準備が進められていることから、メアリとドゥアロウ侯爵の結婚はシャーロットの発案であったと考えられる。なぜなら「注意：『メアリは私が満足できる女性のひとりである』とのチャールズ・ウェルズリ卿の仰せ」というこの原稿の終わりのメモ書きから、シャーロットが新しいヒロインを気に入っていたことがわかる。またシャーロットは 'The Last Will And Testament Of Marian Wellesley Marchioness Of Douro Duches Of Zamorna And Princess Of The Blood Of The Twelves' (1. 1834) を書いて、ヒロイン交代への準備を整えているのである。いずれにせよブランウェルに異存はなかった。メアリとドゥアロウ侯爵の結婚によって、それまで敵対関係にあったドゥアロウ侯爵とエルリントン卿が義理の父子となり、両者の関係は新たな局面を迎えることになる。

(3) ノーザンガーランド伯爵の深化

エルリントン卿がノーザンガーランド伯爵 (Earl of Northangerland) として登場する作品は、シャーロットの 'A Leaf from an Unopened Volume' (1. 1834) が最初である。1858年という未来に設定されたこの作品の著者はチャールズ・ウェルズリということになっている。だが彼は「ある見知らぬ人物」に口述筆記させられたもので、自分はこの物語に「いっさい責任はない」と断っている。この人物とはおそらくブランウェルのことで、そこで語られているのはアングリアの未来である。物語ではザモーナ公爵 (Duke of Zamorna) がアングリアを統治して25年になり、今や40歳を越えた彼は国王よりさらに強大な力をもつ皇帝 Emperor Adrian として君臨している。そこには義父ノーザンガーランド伯爵の姿もある。アングリアへの言及がなされるのはこの作品が最初だが、シャーロットが本格的にアングリアを舞台とした作品を書き始めるのは1834年10月以降である。

アングリア建国のシナリオもまたブランウエルの主導によるものであった。彼は新たな領土をもたらすことになる戦争について書き、凱旋したザモーナ公爵にヴェルドポリス議会で勲功を求める次のような演説をさせている。‘Now, for these services rendered by me to my country, I demand from it the possession of my fields of battle, I demand, my Lords, the Provinces of Angria, Calabar, and Northangerland and Gordon, to be yielded up to me unconditionally and immediately. . . .’ (SHGBM1, 326) この要求はノーザンガーランド伯爵の助力によって、1834年2月18日に議会で承認される。アングリアはグラスタウン連邦の東に位置し、7地方で構成され、それぞれに首都があり総督府が置かれている。ブランウエルはかつてのグラスタウン連合と同じように、面積や人口などについて詳細な目録を作った。ところでアングリアという地名は、インド南西端のマラバル海岸に面した地域に君臨していた海賊の王国の名に由来するものと考えられる。その王 Kanhoji Angria は17世紀末から18世紀にかけて強力な海賊軍団を組織し、東インド会社の船舶を襲い、その名はヨーロッパにまで鳴り響いたという。(なおゴンドルもまたインド中央高原の地名である。)

ブランウエルはアングリア王国の首相となったノーザンガーランド伯爵の造形に、虚無的で厭世的な無神論者という側面を加えていく。‘Death of Mary, Wife of Northangerland’ (9. 1834) は時間を遡って、伯爵が最愛の妻メアリ・ヘンリエッタと死別したときの模様を描いている。自分の死が近いことを悟ったメアリは、天国で再会できるよう夫に悔い改めを願う。だが神を信じない伯爵にとって死後の世界は無であり、死とは永遠の別れでしかない。彼はこの日から「この世になんの喜びも目的も見いだせないままに」生きていくことになる。死は絶対的な別れを意味し、喪失感は癒されない。その後、虚無感と厭世感がノーザンガーランド伯爵の支配的な気分になっていく。故郷を捨てヴェルドポリスに出た彼は、サン・クレールを陥れる策謀を巡らしアシャンティ族に内通する。これによって、すでにシャーロットが書いていた‘The Green Dwarf’ (9. 1833) と物語が整合する。

ノーザンガーランド伯爵は娘を溺愛するが、息子たちに対しては非情な父親である。父と息子が対立する状況は、シャーロットの考案であろう。メアリが初めて登場したブランウエルによる‘The Politics of Verdopolis’ (10-11. 1833) には、彼女の兄たちの姿はない。だが同時期に書かれたシャーロットの‘The Secret’ (11. 1833) には、マリアン・ヒュームのかつての許婚者としてパーシの三男 Henry Percy が登場している。物語では男児に対する夫の異常な憎悪から息子たちを守るため、パーシ夫人はマリアンの母親と赤ん坊を交換することを約束する。これは実行されなかったのだが、後にヘンリはマリアンと婚約してから航海に出て溺死する。物語ではこのいきさつを知る長兄エドワードが、ヘンリになりすましてマリアンを脅すという展開になっている。半年後、シャーロットは‘Stanzas on The Fate Of Henry Percy’ (6. 1834) において、ヘンリの非業の死を悼む詩を書いている。それによればヘンリは、父親の命令を受けた Captain Steighton によってマーメイド

号の船上で殺されたことになっている。

同じ時期にブランウェルは 'The Wool is Rising' (6. 1834) で、今は羊毛業者として成功している22歳の Edward と、兄の使用人に甘んじている William のパーシ兄弟を登場させている。彼らは生後間もなく父に捨てられたが、部下のステスが命令に背いてふたりの命を助けていたのである。シャーロットは 'The Spell' (6-7. 1834) でブランウェルの物語を取り入れ、エドワードとウィリアムが早くから家庭を失い、父の「不当な裁き」によって追放され、兄が弟を虐待したことなどを書いた。間もなくウィリアムは羊毛工場を飛び出して軍隊に入り出世するが、兄弟の確執とそれが残した心の傷は消えない。肉親の愛薄く独力で生き抜いたウィリアムの苦悩を、シャーロットは後に 'Captain Henry Hastings' (2-3. 1839) で描いている。

ブランウェルは 'The History of Angria' (5. 1835-9. 1836) をはじめとする一連の原稿でアングリアにおける政治抗争を描く一方で、'The Life of Field Marshal the Right Honourable Alexander Percy' (4-11. 1835) において、これまで欠落していたアレグザンダー・パーシの半生を書き加える。物語は2巻から成り、14世紀にまで遡るパーシ家の歴史が述べられ、アレグザンダーの生い立ち、多感な少年時代、最初の妻オーガスタとの結婚、父親殺し、妻との死別などが語られる。

第1巻。パーシ家はもとは Northumberland 一族であったが、14世紀に一族を追われ Northumbrian Cheviots に住み、貴族けん盗賊として一帯に勢力を広げた。薔薇戦争、チャールズ1世の失脚、1715年の 'Old Pretender' の乱などに関与したが、アレグザンダーの父 Edward Percy の代に破産しアイルランドに渡った。そこで彼は賭博で財政を立て直し、貴族の娘 Lady Helen Beresford と結婚した。エドワードの餌食になっていた Mornington 卿（ウェリントン公爵の父）が彼の企みに気付き始めたので、卿を謀殺した。その後エドワードはアフリカに建設された植民地に渡り、自分が殺した男の息子が治める Wellington's Land に住み着き、人間嫌いで無慈悲な領主として人々に恐れられている。その彼に長男アレグザンダーが誕生する。家庭教師をしていた私 (Bud) は、少年の頃の彼については多少知っている。美しい音楽に感動して涙を流すような少年で、母親には溺愛されていたが、厳格な父親には懐かなかった。神や死後の世界への関心はやがて無神論にとって代われ、端正な顔立ちに冷笑を浮かべ残忍な性格を窺わせるところは、やはりパーシ家の血筋を思わせるものがある。18歳になった時、アレグザンダーは父と対立して家を出、ヴェルドポリスで放蕩な日々を送る。そこで再会した Lady Augusta Romana di Segovia との交際が始まり、やがて彼女との結婚を決意する。だが父はそれを許さず、息子を Philosophers Isle に送り大学に入れてしまう。島でのアレグザンダーは恋人への手紙に、いつの日かアフリカ全土を熱狂の渦にたたき込んでみせるという野望を書き送り、学問に打ち込み優秀な成績を修める。

第2巻。エドワード・パーシが落馬したという知らせがオーガスタのもとへ届く。その後、一命を取りとめたらしいことを聞いた彼女は、彼を亡きものにする方策をたてる。そこに島を脱出した

アレグザンダーが現れる。彼女は彼の耳に、本当の自由を手にするには自分たちの結婚に反対している父を殺す以外にないのだと囁く。二人は手をとりあって地獄への道を歩み始める。父の殺害は、負傷したエドワードに付き添っていた夫人が、息子の帰国を知り、会いに行っている間に実行される。命令を受けていたステスが、医者の際を見計らって主人の首を絞める。葬儀の日、夫人はうなだれ、アレグザンダーは青白い顔に不安の色を浮かべている。エドワードの死については多くの人が疑問を抱いていたが、あえて真相を問うものはいなかった。夫人も夫の死を悲しみながらも、息子への愛の方が勝っていた。その後、オーガスタが毒殺される。金貸し業者 Jeremiah Sympson は以前からパーシ家の相続人アレグザンダーに多額の金を用立てていた。ところがオーガスタが夫に返済の必要はないと入れ知恵したため、シンプソンがアレグザンダーの取り巻きたちと図って彼女を葬ったのである。腹心に裏切られ最愛の妻を奪われたアレグザンダーは、財産を整理し借金を清算し仲間と手を切る。20歳の時のことであった。この日以来、彼は厭世的で冷酷無比な無神論者ノーザンダーランド伯爵への道を歩み始めたのであった。一度はアフリカを離れる決心をした伯爵だが、ウェリントン公爵の長男（後のザモーナ公爵）の誕生祝いのパーティの席で、Mary Henrietta Wharton を見初める。

この物語で重要な意味をもつアレグザンダーの父親殺しは、すでにシャーロットが 'A Day Abroad' (6. 1834) で取り上げていた事件を、ブランウエルが書き変えたものと思われる。シャーロットはノーザンダーランド伯爵の得体の知れない悪意を説明するために、彼の過去の殺人事件を書き加えることにした。彼がまだ20代の頃、父の友人であった老 Caversham 卿と決闘になりその命を奪っていたというものである。それをブランウエルは息子による実の父親殺しとすることで、近親者の復讐劇に仕立て上げる。彼は『ヘンリ四世』に取材してパーシ家の由来を書きおこし、『マクベス』に基づいて父親殺しの状況を作り上げ、アレグザンダーをサタンに例えることで、悪役としての人物像に深みを与える。アレグザンダー・パーシはもはや素性の知れない「ごろつき」ではなく、イギリスの旧家の流れを受け継ぐ貴族である。単なる反逆児、扇動者、陰謀家に過ぎなかったロウグが、超人的な能力と血の呪いを受け継いだロマン主義的なヒーローとして位置づけられることになる。

パーシ家の男たちは先祖から凶暴な性格と反逆者の血を受け継ぎ、その家系の中でアレグザンダーもまた、父エドワードに劣らぬ冷酷な陰謀家になっていく。アレグザンダーの取り巻きたちも、その多くが父親の代からの付き合い (S' Death や Caversham) であったり、その息子たち (Montmorency, Arthur O' Connor, George Gordon など) であったりする。同じまたは類似した名前をくり返し使う傾向はシャーロットにも見られるが、そうした名前を与えられた人物は先人と同じような運命をたどっている。こうした血の呪いともいべきものを、ブランウエルは自分の主人公に見ていることがわかる。アレグザンダーは自分の中に流れる残忍で凶暴な血をおぞましく思い、

それが息子たちに受け継がれていくことを恐れる気持ちへと発展していくのである。

シャーロットは 'A Peep into a Picture Book' (5-6. 1834) において並外れた美貌と悪魔的な魅力を備えたザモーナ公爵と、洗練された容姿と計り知れない英知を秘めたノーザンガーランド伯爵の姿をスケッチした。彼らの魅力はアングリアの抗争のなかで発揮されるのだが、戦いが終わり平和が回復されると、彼らの行き場は失われていく。ノーザンガーランド伯爵はその暗い過去を背負って、虚無的な反逆者としてアングリアの平和を脅かす内戦の首謀者であり続けた。ザモーナ公爵が代表する権威、体制、秩序を覆すことがノーザンガーランド伯爵の生を意味づけていたのであり、そのため彼はつねに現状打破を訴えては民衆を扇動し、革命・反革命をリードし続けたのである。だが戦火が収まり、アングリアに日常生活が戻ってくるとノーザンガーランド伯爵の存在意義は急速に失われていく。

(三) ブランウエルのペルソナについて

ブランウエルの作品は構成、物語性、心理描写といった面から見れば、シャーロットに比べて低い評価に留まるであろう。筋書きといえは戦争や政争の模様を延々と書き連ねただけで劇的な盛り上がり欠け、人物の内面的な掘り下げも見られない。だがブランウエルを捉えていたものは、劇的な物語の展開でもなければ愛憎絡み合う人間関係でもなかった。ほとんどパターン化した陰謀と反乱の繰り返しの物語から浮かび上がるのは、一人の人間の強烈な個性である。既成の権威、秩序、価値観を否定し、宗教道徳にも縛られず自分の欲望のままに行動するアレグザンダー・パーシを通して、ブランウエルは望ましい自分の姿を演出したのである。

13歳のブランウエルが生みだしたパーシは、31歳の死のときまで彼と共にあった。パーシはその強さゆえにブランウエルのペルソナであり続けたのだが、やがて虚勢を張ることが耐え難くなってくる。ほとんど人間的な感情とは無縁であったパーシが、夫として父として苦悩する姿が見られるようになる。彼のなかに人間的な弱さ卑劣さ寂しさを描くことによって、ブランウエルはあるがままの人間の姿を受け入れることへと近づいていく。そうした変化のひとつを、作品における死の描き方やペルソナの多様生の中に見ることができる。

(1) パーシをめぐる死

ブランウエルの作品では多くの死が描かれる。初期のグラスタウン物語において戦場で無数の兵士が死ぬのはともかく、主人公パーシのまわりには常に死の影がある。'Letters from an Englishman' (9. 1830-8. 1832) では、反乱を起こしたロウグ自身が銃殺刑に処せられる。その記述は 'The soldiers were ranged opposite about 12 paces distance with their pieces levelled. . . . 'Gentlemen

FIRE'. . . The soldiers fired. I saw a bright flash and a loud crash. He fell dead. Alexander Rogue was no more.' (SHCBM1 :158) といった簡単なものである。ここで死んだはずのロウグがなぜ生き返ったかという説明もないままに、再び 'The Pirate' (2. 1833) に登場している。そこでは自分の命を狙った部下ステスの頭を銃で打ち抜き、脳みそがあたりに飛び散る様子が描かれる。すなわち 'Rogue then snatching up a pistol from the table clapt it to his head and fired. The skull was blown to pieces and the brains scattered round the room.' (SHCBM1 :181) という具合である。状況はグラフィックに描かれるが、死の恐怖や悲しみは描かれていない。

ブランウェルが死を内面化していないという意味ではない。1825年の姉マライアの死をひとり目撃したブランウェルにとって (シャーロットとエミリはまだカウワン・ブリッジで、アンは当時まだ5歳だった)、死は衝撃的なものであった。それから10年余り後の1835年12月に『ブラックウッズ誌』の編集者に宛てた手紙の中で、彼は姉が死んだ頃に読んだ同誌の一節を引用している。「ずいぶん昔の事のように思われる。金髪の美しい姉、見る人すべてを虜にした姉と手を取り合って踊ったのは。姉の死んだ遠い遠いあの日。この世のいかなる時よりも暗く閉ざされたあの時。ピロードの覆いを掛けられた姉の棺は——静かにゆっくりと——忌まわしい泥土の中へと降ろされ、わたしたちは教会墓地から、二度と再びそこには戻れないと感じながら、そして死を分かちあいたいと願いながら、死者のようにそこから連れ出されたのであった。」(Letters 1 :133) この死の体験が彼の作品に投影されてくるのは、'The Politics of Verdopolis' (10. 1833) において、パーシが最愛の妻メアリ・ヘンリエッタの墓を訪れる場面である。この時パーシは約40歳で、メアリは18年前に死亡したことになっている。しかし彼は今でも亡き妻を偲び墓参りを欠かさず、彼の変わらぬ愛を示すように墓石は歳月のなかで苔生すこともないのである。それは木漏れ日を浴び、森の静けさに包まれて平安に憩っているように見える。

だがこうした美化された死は、1年後に書かれた 'Death of Mary, Wife of Northangerland' (9. 1834) では虚無感に取って代わられている。妻がこの世にいないという事実は、何をもってしても変わらない。パーシはいう。'However long I live, however mighty I may be, there shall be no look or voice of thine to lighten me, but the great certainty that this stone in this West of Africa here covers and presses over there.' そして彼が到達する結論は 'And I, while memory is fading and the past is sinking into nothing, shall know, as I do know, that I SHALL NEVER SEE THEE MORE.' (HT 41:82) なのである。パーシにとって死とは無であり、その喪失感は決して癒されることがない。15歳頃から教会に行かなくなっていたブランウェルは、自分の中にわだかまっていた神への不信感をパーシに投影させていると見ることができる。

先の『ブラックウッズ誌』への手紙は、同誌の主要な執筆者 James Hogg (1770-1835) が死亡したことを知ったブランウェルが、彼に代わって執筆を希望する旨を伝えたものである。「エトリッ

クの羊飼い」(Ettrick Sheperd)の愛称で親まれたホッグは『ブラックウッズ誌』では「アンブローズ館夜話」(Noctes Ambrosianae)という架空のホテルを舞台にした対談集に、愚かしい気取り屋で大酒飲みの道化者として登場する。ブロンテ姉弟はこの連載記事を愛読し、自分たちの雑誌でもこれにならって Bravy's Inn を舞台に Military Conversations を連載したほどである。ホッグには今日でもその名を忘れぬものになっている『悪の誘惑』(*The Private Memoirs and Confessions of a Justified Sinner*, 1824)という小説がある。そこには当時人々の関心の的になっていた「道徳律廃棄論」——キリスト教を信じる者は福音に示された神の恵みを受け、あらゆる道徳律の束縛から自由であるという思想——を信奉する主人公が登場する。神から義人とされたと確信した彼は、神の敵と思われる人間たちを何の躊躇もなく滅ぼしていく。だが彼を支配していたのはじつは悪魔であった。ここに描かれた悪魔にとりつかれた男の物語はブロンテたちを魅了し、ミルトンやバイロンとともにかれらのヒーロー像の造形に貢献したと考えられる。とくにブランウエルのノーザンガーランド伯爵の抑制を知らない肥大したエゴには、ホッグの描く自己を絶対化した狂信家の影響を見ることが出来る。(なお、*Shirley* (1849)にも道徳律廃棄論者の織工が登場する。)

悪魔的な傾向を強めるパーシは、近親者の死に関わるようになる。だがいずれの場合も彼は直接その死に手を貸すことはない。パーシは死の命令を下しても、その結果を自分で見ることはなく、後悔に襲われたり罪悪感に苦しむようなことはない。多くの場合、殺人を実行するのはステスである。すでに見たように彼は父親の代からパーシ家に仕える年齢不詳の召使いで、パーシに影のようにつきまとい、悪事に手を貸す。守り神 Branni の庇護を受ける彼は不死身で醜悪な姿をし、ほとんど人間的な感情をもっていない。

ブランウエルは責任を問われることなく登場人物の生死を自由に操っているわけだが、やがて 'The History of Angria' (5. 1835-9. 1836)において、初めて死と直面することになる。第8巻(9. 1836)では、第2次アンゲリア大戦に乗じて反乱を起こしたノーザンガーランド伯爵が、ザモーナ公爵の政府を打倒し革命政府を樹立している。義父の裏切りに対する復讐として、ザモーナ公爵は妻メアリを捨てる決心をする。夫の愛を失ったメアリは絶望のあまり憔悴し、明日をも知れない容態になる。娘の危篤を知ったノーザンガーランド伯爵は、自分の暗殺計画があることを知りながらも、娘の死の床に駆けつける。そこにはかつてはザモーナ公爵夫人・アンゲリア国王妃として昇りゆく太陽のように輝いていたメアリが、いまは影のように痩せ衰えた身体を横たえ、迫りくる死に脅えている。

'Speak, father, I am miserable, and I cannot bear to die! Oh, if you knew what I have suffered; if you could feel what I feel, you would have come to me sooner, you would not have left me so. . . . O Father, they have talked to me about Heaven; they have been either trying to fit me for it, or to

pacify me with it. But they know nothing, or else they would think their very souls well spent to buy back what I am going to lose for ever.' (SHCBM2:220)

この世(ザモーナ公爵)に未練を残すメアリに平安な死は訪れない。それは彼女の母つまりノーザンガーランド伯爵夫人メアリの死のように天上の世界への旅立ちではなく、あくまでも地上の愛への執着を捨てきれないキャサリン・アンショウの死を思わせるようなものとなっている。ノーザンガーランド伯爵は娘の死に打ちのめされる。「暗く沈んだ目と額、髭が伸び落ちくぼんだ頬」が、彼の苦悩を物語っている。ブランウェルはこの作品によって、これまで彼を呪縛してきた死に初めて正面から向かいあったということができよう。死の現実を直視し、それが自分に与えた精神的打撃を認めることで、ようやく死の喪失感を克服することができたのである。

(2) ブランウェルの自画像をめぐって

1835年秋、ブランウェルはロンドンに向かったものの、憧れの王立美術院への入学を果たせないまま帰郷した。彼が味わった初めての挫折だが、姉の死とおなじように、ブランウェルがそれを認めるまでには時間がかかる。その後も以前と変わらず詩や散文を書き続け、『ブラックウッズ誌』へ投稿の希望を伝えるなど、一見この事件は彼にとってそれほど大きなショックであったようには見えない。しかし半年余りを経て書かれた 'The History of Angria' 第5巻 'Charels Wentworth's Visit to Verdopolis' (5. 1836) を読むと、そこからはブランウェルの味わった自信喪失と無力感の大きさが伝わってくる。物語では憧れのヴェルドポリスに出たチャールズだが、華麗な町並みに圧倒され名士たちに会いに行く勇気も湧かず、ぼんやりと欄干にもたれて故郷を思いだし涙ぐんでいる。気が減入り当てもなく通りを歩くうちに、エルリントン邸の前に出る。そこに出入りする名士たちの姿を想像し、いつかは自分もその仲間になろうと勇気を奮い立たせるのだが、その一方で、そんな夢が仮になかったとして、人はほんとうに幸せになれるのだろうかという疑問が湧いてくる。物語のチャールズは戦乱の行方を見届けようと街に残るのだが、ブランウェルは無言のまま帰宅し、将来の方針も定まらないままに38年初頭までハウースの村に留まっていた。

絵描きの夢が破れた後、ブランウェルは作家をめざして『ブラックウッズ誌』の編集者あてに4回(1835年11月21日、同年12月7日、1836年4月8日、1837年1月9日)にわたって手紙を出したほか、ワーズワースにも手紙(1837年1月19日)と詩の一部を送っている。だがどこからも返事はなく、挫折感は増すばかりだった。こうした背景の中でアングリアにおけるノーザンガーランド伯爵を見てみれば、その動機が不明であった破壊活動や反社会的態度にも多少の理解が及ぶように思われる。自分の創造した王国アングリアを舞台に、超人ノーザンガーランド伯爵をペルソナとして生きる快感はブランウェルに現実の苦悩を忘れさせてくれるものであっただろう。1836年から38年

にかけては、彼の創作意欲がもっとも旺盛な時期である。

この頃からブランウエルの別な一面を投影した Henry Hastings が登場する。彼は1834年のアングリア建国時には、国歌や国王の戴冠式の祝典曲、議会開催を祝う唱歌を作った詩人として華々しいデビューをしたことになっている。その後、第29師団の大佐として執筆だけでなく戦闘にも参加する。だが 'A New Year Story' (1. 1836) 第1巻に現れた彼は、本格的な戦いが始まる前に負傷して後退し、後に戦線に復帰するのだが、蟻の群れのような両軍の兵士たちを丘の上から見て虚しさを覚える。その後1837年1月と7月の断章 ('Fragment of a Prose MS', SHCBM2) におけるヘイスティングズは、自分の才能が認められないのは周囲の人々の嫉妬のためであると不満をかこち、酒や賭事に憂さ晴らしをする 'a debauched and reckless desperado' へと変貌している。さらに 'Percy' (10-12. 1837) では、酒場で仲間と騒ぎながらも気持ちは酔えず、ひとり冷めた目をしているヘイスティングズの姿がある。名声を求め野心を漲らせてアングリア戦争に赴いたのはほんの数年前前である。それが今では望みはついで去り、軍籍を剥奪され司直に追われる身になっている。酒のために体力は衰え、顔色はどす黒く淀み、気持ちは荒んでいる。その顔に輝きが戻るのは、かつての武勲を思い出す時だけである。

こうしたヘイスティングズをシャーロットは自作に導入した。'Julia' (6. 1837) では、女性たちを相手に得意げに戦いの手柄話をしているが、からかわれていることに気づいてむっとするといった滑稽な、だが自意識過剰で傷つきやすい繊細な青年として描かれている。その後の 'Captain Henry Hastings' (2-3. 1839) に登場する彼は上官殺しの脱走兵で、妹エリザベスのもとに逃げ込むが、けっきょく逮捕され命惜しさに仲間を裏切る卑劣漢である。1838年から39年にかけて創作された 'The Wanderer' と題された詩が、この頃のブランウエルの心情をよく表している。彼はこれを後に 'Sir Henry Tunstall' と改題し、完成して1840年4月15日に De Quincey に送った。(なおこの詩は後に *De Quincey Memorials* (1891) および Mrs Oliphant が『ブラックウッズ誌』についてまとめた *Annals of a Publishing House* (1897) に収録された。) ここでブランウエルは16年にわたるインドでの勤務を終えて、両親や妹たちの待つ故国に帰還した傷ついた兵士を登場させている。家族と再会した喜びのなかにも、歳月の中で生じた微妙な変化に気づかされる。野望を果たし騎士の称号を与えられたものの、彼の心の虚しさは癒されない。ここで描かれるのは英雄的な兵士の姿ではなく、過ぎ去った時間を苦い思いで振り返る一人の人間である。

1839年5月にはブラッドフォードのスタジオを閉めハワースに戻っていたブランウエルは、すでに22歳になっていたが、依然として将来は見えてこなかった。その年の暮れ、Postlewaite 家に家庭教師として赴くが、職務怠慢から半年後に解雇された。その間に彼は S. T. Coleridge の息子 Hartley Coleridge に手紙を書き、湖水地方に彼を訪ねるなどして、再び文学への夢を育てていた。1840年10月にマンチェスター・リーズ鉄道の駅員になり、42年4月に解雇されるまでの間に、ブラ

ンウェルは地元紙 *Halifax Guardian* や *Leeds Intelligencer* に数篇の詩を発表している。これらの詩のなかにはノーザンガーランドと署名された作品もあり、ブランウェルの再起への願いが読み取れる。

‘And the Weary Are at Rest’ はアレグザンダー・パーシを主人公とした最後の散文作品である。執筆時は記入されていないが、ロビンソン家での事件が反映されていることや、友人 Leyland 宛の1845年9月10日付けの手紙で、小説に行き詰まっていることを伝えているなどの状況から、この作品は1845年秋頃に創作されたものと推定されている。

肉体の衰えに老いの兆しを感じているパーシは、かつての酒を飲み女性を誘惑し生を燃焼させていた日々を取り戻したいと焦っている。猟のシーズンで仲間たちと Thurston 家に滞在しているが、彼の関心は獲物ではなく、夫に顧みられないサーストン夫人 Maria に向けられる。パーシは妻に死なれた寂しさを訴え、孤独を癒すには愛が必要であると説く。だが彼女は喜びも悲しみもあるがままに黙って受け入れるのが人生であると答え、彼に自制を求める。パーシは彼女に自分の雄姿を見せようと教会で熱弁をふるう。その博識で格調高い演説は人々を感動させ、かつての扇動者の姿をほうふつさせるものがある。翌朝、パーシはふたたびマライアを訪ねる。彼に惹かれながらも夫を恐れる彼女を繁みに誘い込む。髪の乱れがふたりの関係を暗示する。物語はマライアが神に許しを乞いながら、その一方、パーシに恋することが罪であろうかと反問しながら揺れる姿を描いて、物語は未完のままに終わっている。

この作品はおそらくブランウェルによる最初で最後の恋愛物語であろう。パーシはこれまで多くの女性を妻あるいは情婦としているが、その関係が描かれたことはなかった。パーシとゼノウビアの関係はシャーロットの分野で、ブランウェルの関心はいつもパーシひとりに向けられていた。ここでの初老のパーシは、かつての放縦なパーシとは異なっている。人妻マライアに対して、妻を失った心の空虚さと孤独を訴え、彼女の愛に慰めを求めるのである。だが彼の本心はマライアを誘惑することにあり、その目的のためには手段を選ばない。「不幸な人妻のために今まで神に祈ったことのない男が初めて祈る」のも、教会で熱弁をふるって宣教師支援のための募金を募るのも、彼女を振り向かせるためのポーズに過ぎない。物語にはパーシと共に悪事を働いてきたモンモレンシー、オコンナー、クォーシャなども変わりばえしない姿で登場しているように、パーシもまたその誘惑者、扇動者としての本質は変わらない。というより変わりえないのである。

結 び

ブランウェルはパーシを悪役として、その造形に自分の否定的要素を盛り込んだ。パーシが暗い天に向かって拳を振りあげ侮蔑の言葉を吐くのは、ブランウェルの反逆精神の反映であった。彼は

つねに現状に不満で、革命によってそれを破壊し無に帰そうとするが、代わって何かを創造することはない。彼にあるのは現状否定と破壊本能だけである。それらはやがて厭世感と自己憐憫に変わっていく。すべてが彼を中心に動き、彼の肥大したエゴを抑制するものがない。そして最後はそのエゴゆえに自滅していくのである。

ブランウェルの作品には戦いはあっても葛藤が見られない。それは価値観の対立がないためである。海賊としてデビューしたパーシは、海上ばかりでなく陸上においても絶対的な権威をもち、自分自身が法律であるような世界に生きている。彼は自己を絶対化し、自分いがいの誰にも従わず神にも仕えない。ブランウェルはこうした悪魔的ヒーローに陶醉したのだが、ついにその夢から醒めることがなかった。同じようにザモーナ公爵に魅せられ恋愛物語を紡いでいたシャーロットが、愛に苦しむヒロインの姿から女の現実に目覚めていったのに対し、ブランウェルは肥大した自我ゆえに孤立に沈んでいった主人公に自己を重ね合わせることから脱することがなかった。

ブランウェルのいわば破滅型の主人公は、シャーロットのヒーロー造形に大きな影響を与えた。彼女の初期のヒーローはウェリントン公爵に代表されるような完全無欠な英雄であり、それが彼の息子ドゥアロウ侯爵に移行し、さらに侯爵が悪魔的なザモーナ公爵へと変貌するにはパーシことノーザンガーランド伯爵の存在は欠かせないものである。伯爵の暗さは、シャーロットの場合パイロンなどから想像するに留まり、描写もレトリックを駆使するだけで、彼女の内なる暗黒の投影とは感じられない。姉のような上昇志向をもたず、心に死の暗い記憶をとどめ挫折感を引きずっていたブランウェルは、ノーザンガーランド伯爵にあるべき理想の姿を求めるよりも、自分の内に潜む否定的な部分を体現させた。それがシャーロットの描くノーザンガーランド伯爵には見られない本質的な悪の要素を形成しているのである。

Abbreviations

- Alexander CB *An Edition of the Early Writings of Charlotte Brontë*, ed., Christine Alexander, Oxford: Basil Blackwell, vol. 1, 1987/vol. 2, 1991
- HT 'Miscellaneous Transcriptions of the prose fictions of Branwell Brontë' made by C. W. Hatfield. Unpublished manuscripts and typescripts. Archives, Brontë Parsonage Library, Haworth.
- Letters *The Brontës: Their Lives, Friendships, and Correspondence* (The Shakespeare Head edition), ed., Thomas J. Wise and John Alexander Symington, 4 vols., Oxford: Basil Blackwell, 1932
- SHCBM *The Miscellaneous and Unpublished Writings of Charlotte and Patrick Branwell Brontë* (The Shakespeare Head edition), ed., Thomas J. Wise and John Alexander Symington, 2 vols., Oxford: Basil Blackwell, 1936 and 1938.

Select Bibliography (上記以外)

<Primary>

And the Weary are at Rest, ed. C. W. Hatfield (privately printed in an edition of fifty copies, 1924)

Brother in the Shadow: Stories and Sketches by Branwell Brontë, ed. Mary Butterfield and R. J. Duckett (Bradford: Bradford Libraries and Information Service, 1988)

The Poems of Patrick Branwell Brontë: A New Text and Commentary, ed. Victor Neufeldt (New York, Garland Press, 1990)

'The Leyland Manuscripts' letters and sketches by Patrick Branwell Brontë.

The Brotherton Collection, Brotherton Library, Leeds University, Leeds, England.

<Secondary>

Alexander, Christine, *The Early Writings of Charlotte Brontë* (Oxford, Basil Blackwell, 1983).

du Maurier, Daphne, *The Infernal World of Branwell Brontë* (London, Victor Gollancz Ltd., 1960).

Evans, Barbara and Evans, Gareth Loyd, *Everyman's Companion to the Brontës* (London, Dent, 1982).

Gérin, Winifred, *Branwell Brontë: A Biography* (London, Thomas Nelson & Sons, 1961).

Lock, J. and Dixon, W. T., *A Man of Sorrow: The Life, Letters and Times of the Reverend Patrick Brontë* (London, Thomas Nelson & Sons, 1965).

Neufeldt, Victor, *A Bibliography of the Manuscripts of Patrick Branwell Brontë* (New York, Garland Press, 1993)

Ratchford, Fanny Elizabeth, *The Brontës' Web of Childhood* (New York, Columbia University Press, 1941).